

新型コロナウイルス感染症の影響
—女子大学生を中心に—

蘭 紅艶

福岡女学院大学紀要

国際キャリア学部編抜刷 Vol. 8, 2022

新型コロナウイルス感染症の影響

—女子大学生を中心に—

蘭 紅艶

はじめに

新型コロナウイルスは世界中で数えられないほど多くの人が感染し、大勢の命を奪い、二年経った現在でも政治、経済、医療などへの影響が続いています。大学では前例の無い状況で、分散登校やオンライン授業、あるいは対面授業とオンライン授業の折衷案としてのハイブリッド形式など暗中模索しながら学生に対応してきました。政治や医療あるいは経済等の様々な分野の専門家が何を優先順位に問題を解決していくべきかの分析や対応法を提案していますが、教壇に立つ教師が、自分たちの生徒の状況を把握することが必要であると考え、学生にアンケート調査を実施し、結果としてまとめました。結果を数値化できない記述式アンケートを採用した理由は、学生たちには、自分が置かれている状況、それに対する自分の感情、対応している行動を自分の言葉で描写する過程で、客観的に状況を整理し、感情のもつれをほぐし、今後の行動計画の指針となるものを発見させることをも目的としていたからです。この調査では、十分に状況を整理できていない言葉も出てきていますが、女子大学生の生の声の中に、教師側が今後の学生への対応法を作成するヒントに出会えることを願っています。

I. 背景

新型コロナウイルス感染症（Covid-19）が発生してから二年続いていて、それまでの「普通」の生活が普通ではなくなり、世界中の人々の生活全般に強い影響を及ぼしています。日本では外出を控える自粛は勿論、外出時のマスク着用、対人距離を保つなど多くの事が余儀なくされ、COVID-19前までの生活と比べて大きく変化が起き、「ニューノーマル」と呼ばれる新しい生活様式が次第に生ま

れました。著しい影響として目立つのが企業の倒産や不況、働き方の変化、生活の変化、就職への影響です。

1. 企業に及ぼす影響（観光業や飲食業などの倒産や不況）

JCast（2021. 8. 14）は新型コロナウイルスがもたらした影響や対策について、関連本「疾病と投資歴史から読み解くパンデミックと経済の未来」（中原、2020）を紹介し、コロナ以前の社会に完全に戻ることはなく、本に書かれているように、「2020年は変化の起点となる年だった」と強調しました。

その変化の一つは企業への影響であると述べられました。NHKの2021年8月4日のニュースでは、新型コロナウイルスの影響で倒産した企業数は、8月3日までで1,860社となり…【これからの】緊急事態宣言の延長や拡大の影響で、飲食店などを中心にさらに倒産が増加するおそれがあると指摘され、業種別では「飲食店」が最も多く、続いて「建設・工事業」、「ホテル・旅館」、「食品卸」でした。

他に、2021年6月18日PRTIMESはコロナ禍が旅行業への影響について、「観光業界が大きなダメージを受けるなか、2021年に入って旅行会社の市場退出が急増していることが分かった」と報じました。「2021年に入っても単価の高い海外渡航の制限が続いたほか、国内旅行も緊急事態宣言の再発出で稼ぎ時となる3月の卒入学シーズン、5月のGWなど大型需要が2年連続で消失している」厳しい情勢を受け、「新規事業への進出で打開を図るケースもあるものの、大手旅行会社でも大幅な減収や巨額の赤字計上といった事例が相次ぎ、苦境の出口は見えていない」と旅行業界への深刻な打撃が述べられました。

2. 働き方の変化

先述した中原（2020. 12.）の「疾病と投資歴史から読み解くパンデミックと経済の未来」では働き方の変化について、「パンデミックによって半強制的にテレワークを導入せざるを得なくなり…テレワークの普及によって、日本人の働き方の意識が『時間』から『成果』へと変わっていく効果も期待できる」と述べられ、働きに対する根本的な変化が予測されました。

山梨県（2020. 11. 13.）が「働き方～コロナ禍による影響・変化～」では「ウイズ／ポスト・コロナにおける働き方」についてアンケート調査の結果を公表しま

した。コロナによる環境の変化、意識の変化と働き方の変化を中心とした調査が行われて、環境の変化については、17,340社に対して調査した結果、在宅勤務、リモートワークを実施している企業数が緊急事態宣言中には55.96%で、宣言前の25.39%より倍以上急増しましたが、緊急事態解除後取りやめた企業が全体のおよそ2割程度（22.85%）との結果になりました。意識の変化では、「仕事への向き合い方への変化などの意識変化」と「(仕事よりも)生活を重視するように変化した」との傾向が報告されました。また、意識の変化では、コロナ禍によってキャリア感に変化があった割合が約半数で、このうち「企業に依存せず、自律的にキャリアを形成していく必要があると感じた」割合が9割を越えた結果となりました。さらに、キャリア感に変化があった者のうち、「どこでも活躍できる自身の強みを可視化する必要があると感じた割合、スキルアップや新しいスキル習得のために時間を割く必要があると感じた割合はそれぞれ9割を超える」と報告されました。

Globis Career Noteが2021年8月10日に「コロナによって起こった社会の変化と、備えておくべき個人のキャリア」の記事では、コロナによる打撃を受けたことで、終身雇用を維持することが難しくなり、人の流動も進み、副業の増加が予測された上で、テレワークによる仕事が見えにくい代わりに成果に重きを置かせざる得ない事から、コロナがきっかけで、実力を重視する成果主義になる雇用・働き方の変化が述べられました。また、コロナ終息後もテレワークが一般的になれば、こうした動きも加速していくと思われます。他に、個人のキャリアの変化も議論されました。コロナ前までに一般的だと思われる企業が個人の「人生全般に責任を持つ」という終身雇用が難しくなり、個人が「自分は何をやりたいのか」「どういうキャリアを選びたいのか」といったことを、きちんと考え、自分で道を切り開いていかなければならないことと、個人として常に自己の能力を上げ、自分の「市場価値」を高めていかなければならないという圧力も強まっていくと指摘されました。

3. 生活の変化（オンライン授業の現状と課題）

ニューノーマルの生活では私達が普段外出時マスクを着用するのが必須となり、ソーシャル・ディスタンスを保つことや消毒することなどで自分の安全を守りますが、学校では感染防止のため、対面授業ではなく、遠隔授業に切り替えること

が多くあります。テレワークのように、大学を含めた教育機関でも遠隔（オンライン）授業に変更しなければならないことで生活のデジタル化が急激に進んでいます。

大学ジャーナルが（2021. 8. 11.）日大学のオンライン授業について、日経 BP 全国調査の結果を報じました。日経 BP コンサルティングの全国調査（2021. 6.）では全国の大学、短期大学、高等専門学校を対象に郵送、ウェブ回答方式で320校から回答を得た結果、96.8%がオンライン授業を実施しましたが、準備期間が1カ月ほどしかなく、著作権など専門的な対応に遅れが出たことがわかりました。

東洋経済 Online（2021. 4. 25.）の「リモート強制された大学生たちの偽らざる本音－オンラインが当然の環境で育った世代の新常識」では、学生にとって学びの達成度が高い項目は、「オンライン授業でのやりとり」と「レポート課題や宿題」であり、達成度が低かったものは、「社会で通用するスキルの獲得」、「学生時代を象徴するような取り組み」、「自己成長・スキルアップ」、「自分の成長のための新しい出会い」などが挙げられました。一方で満足にできなかった度合いが強いものは「留学」「課外活動」「ボランティア」「ディベート」があり…“移動”や“人とのコミュニケーションを伴うもの”に満足を得られていない、また“社会での実践を見越したスキルの獲得”や、“新たな人脈形成”が達成できなかったことが述べられました。

大学オンライン授業が進んでいる中で、全国の国公立・私立大学の教員2,996人は「授業に取り残される学生が生じている」と回答したことが東京大学大学経営・政策研究センターが実施した「コロナ禍、コロナ禍後の大学教育」に関する調査でわかりました（FNN プライムオンライン、2021. 5. 25.）。不安や孤独感を感じる学生もいました。朝日新聞 Digital（2021. 8. 10.）では全国大学生生活協同組合連合会が10日公表した「コロナ禍の大学生生活アンケート」の結果を提示し、長引くコロナ禍で大学生が無気力、落ち込み、孤独など深刻な影響が表されたことがわかりました。大学生7,637人にウェブ経由で調査した結果、一番多かったのは「将来に対する不安」で全体平均で66.7%、そのうち入学時から対面授業が少ない同世代と会える機会が少ない2年生が74.1%で目立ちました。また、朝日新聞デジタル（2021. 9. 21.）は「学生のメンタルケア」が課題であることを提起しました。朝日新聞と河合塾が今年度は6～8月の共同調査「ひらく 日本の大学」で、国公私立の655大学にコロナ禍の影響やオンライン授業の現状などを調

べた結果、学長の8割が「学生のメンタルケア」を、6割が「学生の孤立」を課題と考えていることがわかりました。

PRTIMES (2021. 8. 11.) は文科省の「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」結果と、オンライン・リカレント教育のビジネス・ブレイクスルー大学 (BBT 大学) がコロナ禍におけるオンライン授業について現役学生に実施した調査結果を比較し、オンライン授業の可能性を模索しました。「友人と一緒に授業を受けられない」などの対人関係に関する回答の数値と、理解度に直結する「対面授業より理解しにくい」ことが高い結果になりました。オンライン授業のあり方について、学生がニューノーマルな環境に適応できるよう大学側は努力をする必要があると思われませんが、学生が「一人で学習することが前提のオンライン授業は孤独感があるのは避けられない一方、コミュニケーションの質の向上こそが学生の大学へのエンゲージメントを増やし、孤立感を軽減させ、オンライン授業下での大学教育の質を担保できることを示唆している」ことがわかりました。

4. 就職への影響

新型コロナウイルス感染症は大学生の就職活動にも大きな影響が及びました。NHK Newsweb の2021年3月19日の記事では、厚生労働省と文部科学省は2021年度の春に卒業する予定の大学生の就職活動の状況について全国62の大学の4,770人に調査した結果、大学生の就職内定率2016年以来、5年ぶりに90%下回りました。厚生労働省は「新型コロナウイルスの感染拡大で業績が悪化した企業を中心に採用の中止や減少の動きがあり、卒業を控えた大学生などは就職先が決まっていないケースが出ている」と就職内定率への強い影響に懸念を示しました。

上記の背景や現状を踏まえ、本学での女子大学生を対象に学業、人間関係、日常生活の様式の変化などを含め、全体的に受けたコロナの影響を調査し、今後のコミュニケーションがどう変化していくと思うのかを考察していきます。

II. 研究方法

研究対象者は筆者が担当しているある授業の履修者58名で、最終回の授業で任

意回答で Google Form を用いてアンケートを行いました。対象者は大学三年生と四年生が四名を除き、ほかは二年生でした。現二年生は入学時直前に新型コロナウイルス感染症が広がり始め、入学式もなく、分散登校による科目履修から始まり、オンライン授業を中心として、学園祭や部活などが制限された大学生活を過ごしてきました。彼女たちの声は重要な参考になると思われます。

アンケートは、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学業と学業以外の生活面でどのような影響があったか、大変だと感じたことに優先順をつけるなどどのようなか、それらの大変さにどのように対処したか、この状況の中で自分の中に新たな発見があったか、対人関係とコミュニケーションスタイルがどのようなものになっていくと思うかの項目で、記述式で自由に述べるように指示しました。

Ⅲ. 結果

58名の履修者のうち、留学生が7名、2年次の日本人学生が43名、合わせて50名の回答を得ました。留学生についてはスリランカ1名、ベトナム2名、ネパール4名でした。記述式の回答に共通している部分を抜き出し、そこで表れた内容をカテゴリーにまとめました。カテゴリーとして、1. 新型コロナウイルス感染症による学業への影響、2. 新型コロナウイルス感染症による学業以外への影響、3. 様々な困難・大変さに対する気持ち、4. 大変さへ対する対処・対策、5. 困難な状況で発見できた新たな自分、6. 対人コミュニケーションの変化、7. 今後の対人コミュニケーションのあり方の七つがありました。

1. 新型コロナウイルス感染症による学業への影響

学業への影響は、オンライン授業、教師とのコミュニケーション、クラスメイトとのコミュニケーションの三つの観点が現れました。

オンライン授業の影響は、設備の問題から始まります。日頃の授業からコンピュータを導入していたアメリカでも全生徒に学習環境を整えるのは困難だったと聞いていますが、日本の小中高ではほとんど整備されてなく、オンライン授業は言葉だけが先行し、ほとんど実施できなかったようです。女学院でも、コンピュータの貸し出しから始めましたが、パソコンを購入する学生もいれば、スマホを使う学生も多くいました。コンピュータやスマホの性能の違いにより、接続

が途中で切れたり、データの制限があったりなどで学生はかなり苦労していました。

学生からの回答では、「パソコン操作に慣れてきた」「パソコン技術が上達した」という肯定的な意見もありましたが、大半が戸惑いや不安に触れています。「通信障害によってまともに授業が受けられない」、「授業中にタイムラグが起きてしまって混乱する」、「meet 中やテスト中に Wi-Fi が切れるときがあり一時的に授業が受けられなくなるので不安になった」、「Wi-Fi の影響で授業の読み込みが遅くなるのが、意外とストレスだった」のように、接続の問題で授業参加への影響が多く述べられました。また「対面授業よりも学習しづらい」、「集中力が悪化する」、「授業の理解度が低下する」、「課題が増加してストレスが溜まる」、「英語を耳だけで聞けなくて画面を見続けるのがきつかった」、「外国語については発音やスピーキングなどの授業があまりできなかった」など授業理解度への影響もありました。その他、対面授業とオンライン授業がミックスされたことで、「1限は対面なのに2限以降はオンラインで、電車の時間とかもあるので、ずっと学校のパソコン室で1人で授業を受けないといけなくて、とても効率が悪かった」と感じた学生もいました。

学生だけでなく、教師にとってもオンライン授業は新たな形式であり、コンピュータ操作技能の差が出たようです。「対面での授業がなく、先生の顔が分からずじまいだった教科がある」、「先生とのコミュニケーションが取れない」という学生がいました。その結果、「家で一人で課題をしていて、これは本当に大学の勉強なのかと感じました」、「授業や図書館、施設を使えないのなら、放送大学でもよかったのからと思い始めた」と思う学生もいました。オンライン授業への準備期間が1か月程度しかなかったので、十分な準備ができなかったこともありますが、教師のコンピュータ操作が改善されれば解決できる部分があるかもしれません。

「遠隔授業なので、大学の友達ができない」という学生が多くいました。「授業内でやり取りをしてもオンライン上なので親密になれなかった」、「いつも一緒に授業しているのに実際に会ってみたらとてもごちない感じになる人間関係」との声がありました。スマホで受講している留学生在が、疲れを強く感じて、視力が落ちたこと、日本人の友だちとの対面でコミュニケーションする機会が減ったため、日本語の能力が日々落ちていると感じたことを記述しました。

2. 新型コロナウイルス感染症による学業以外への影響

学業以外への影響は、広範囲にわたり、大学という学び舎の空間が、個人の学業に加えて人間の出会いの場として期待されていることが再確認されました。学校行事、サークル活動、旅行、アルバイト、友達、マスク生活の6項目が上がりました。

学校行事として、「一生に一度の大学の入学式に参加できなかった」、「入学式もなく授業も初めからオンラインだったので、大学での友達作りが大変だった」、「入学式も歓迎会的なもの無く、同級生の友達がほとんどできなかった。そのため学業も友達に聞いたり、一緒に勉強する対面授業ができない、グループワークや演習が減らされている」、「先輩を知らないため全く情報がなく分からないことが多い」、「学校で飲食系や大規模なイベントができなくなった」、「国際交流に参加できない」、「インターンシップがあまりなかった」、「看護実習が病院でできない場合があった」、「成人式や同窓会が中止になった」、「オリンピックのボランティアや海外旅行客へのボランティアをしようと計画立てていたけれどできなかった」、「ボランティアに参加できない」、「航空業界の募集が中止になった」、「同窓会、コンサートやインターンシップなどの一部の行事がオンラインで行われましたが、中止となったのもありました。」学校行事としては、国際キャリア学科の学生には、留学が中止されたのは失望以外の何物でもありません。国際キャリア学科ではコロナ前までは毎年半数以上の学生が留学をしていたこともあり、コロナの影響で入学前から夢である留学をあきらめせざる得ないことが極めて悔しい思いをしたと推察できます。「正直、何で私の代にと思いました。自分がもう少し早く生まれていれば、コロナがもっと後に来れば私は留学できたのに、と感じていました。」「一番は、ずっと夢だったオーストラリア留学に行けなかったことが何よりも悔しいです。」

18名がサークルの事を触れました。「部活に入ろうと思っていたが、コロナの影響の中でその活動ができるのか疑問に思ったため、参加しない選択をした」、「サークル・部活に入部できていない」、「部活の勧誘なども行われなかったため入る時期が遅れた」、「部の活動が制限された」、「部活も全面オンラインになった」、「サークルの遠征がほぼなくなった」、「サークルなくなる」などがありました。入部できなかった、入部できても活動が制限された、サークル自体がなくなったことは、大学生活の大きな部分を喪失したように感じたようです。

21名が旅行に行けなくなったことを回答しました。「受験が終り大学生活を楽しみにしていたが、思うように旅行に行けなかったり、遊びに行くのにも制限があってリフレッシュができなかったことがつらかった」、「長期休みなどを利用して、学習し興味がある場所に訪れようと思ったができない」、他県からの学生が「帰省もしづらくなった」、留学生にとっては「国へ帰れなくなっている」、「家族で海外旅行を予定していたがキャンセルになった」など「国内外問わず旅行に行きづらくなった」との声がありました。

17名がアルバイトの事を述べました。「バイトの採用をもらうのが難しかった」、アルバイトの減少や休業、店の営業時間短縮になったことなどで、「収入が減った」、「安定した収入を得られない」という状況はアルバイトで学費や生活費を賄う学生にとっては安心して学業専念するには難しかったです。

16名の学生が、友人や家族などの関係・コミュニケーションの変化について触れました。「家を出なくて、学校にもいけないから新しい出会いが少なかった」、「大学で友達ができない」、「友達ができるのに時間がかかった」、「友達と仲良くなりやすかった」、「人と会う機会やコミュニケーション取る機会が極端に減ってしまい、繋がりを広めることが困難になった」、「友人と気軽に会うことができなかった」、「色々な人に会う機会が減ったこと」、「家族に会えなくてさみしい」などが挙げられました。友達と会う、遊ぶなどの交流が減ったことで人間関係を築く難しさや関係の希薄化が指摘されました。

11名の学生がマスクでの生活について言及しました。厚生労働省は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に三密（密閉・密集・密接）を避けるよう、またマスクをすることやこまめに手洗いや咳エチケット等も呼びかけました。一年半以上経って、マスクをつけることが生活の一部となりますが、負担に感じたり、夏は暑くて熱中症になるリスクが高くなる事や肌荒れしたりする学生がいると同時に、自尊心の低下と気軽に外出できなくなり、感染への不安を抱える学生も数名いました。「マスクをずっとつけてまわらないといけないということが夏はとても暑くて大変です。」「Having to wear mask and having mask-acne which is causing to have low self-esteem」のように、マスクを常につけなければならないことによって、ニキビが出て、自尊心が落ちた声もありました。

上記以外に、家で過ごす時間が増えたことで、「PCやスマートフォンなどの電子機器を触る時間が多かった」、「オンライン授業で画面を見つめることが増え

たので脳が疲れやすくなった、眼精疲労がひどくなった、画面の見過ぎで記憶力と集中力が以前より減った、寝つきが悪くなって睡眠時間が減った、睡眠の質が悪くなった、やる気やモチベーションが低くなった」の感想もありました。時間はあるが、友達ができない、楽しくないというネガティブな気持ちが学生の回答を通して窺えます。「友人関係、あまり会うことができずもっと親しくなりたいのになれていない気がする」、「対面が少なくて友人と会う機会が少なくなった」、「大学で友達ができない」等が挙げられます。

3. 様々な困難・大変さに対する気持ち

これまで新型コロナウイルスの影響を述べてきましたが、回答者がそれぞれの困難・大変さに対する気持ちをまとめました。困難の受け止め方は3段階になります。1段階としては、不安、つらさ、孤独感、苛立ちや憤り、悔しさ、疲れ、驚き、落ち込みや意欲喪失などのネガティブな感情、気持ちが多く語られました。「大学入学からオンラインだったので孤独感がすごくあった。これから友達ができるのかなとか将来への不安が大きかった」、「普通の大学生活が送れないもどかしさや、悔しさを日々感じています」、「貴重な大学生活が半分近く奪われていることにとっても憤りを感じる」、「すっごく嫌です。今すぐにも終わってほしいです。うんざりです。一年以上もこの状態で疲れました」、「辛い、悲しい面、諦めざるを得ないという悔しい気持ち。何もやる気が起きなくなる気持ち」、「気持ちが沈みやすくなった。イライラの増加」、「悔しいし、終わりが見えないので色んなやる気がなくなった」等が訴えられました。

2段階として、困難を受け止めた学生達です。一年以上続いている状況に対して、「仕方がない」、「適応していくしかない」、「みんな同じ思いをしているからしょうがない」、「もどかしい気持ちだったが、環境は変わらないので、この状況に適応していくしかない」、「現在はコロナウイルスによる影響にも慣れ、前向きに暮らすことができている」のように、現状を受け入れている学生達です。

3段階目は、現状を受け入れたうえで、出来ることを探る、実行するというポジティブな視点を持った学生でした。「皆置かれている状況は同じなので、いかに前向きに行動するかが大切だと思います」、「コロナウイルスに対して苛立ちを感じたが、仕方がないことだと思います。自粛していても勉強ができるから、もっと努力すべきだと感じています」、「目指している業界が採用がなくなってしまっ

たため他の企業など色々知れてよかったです」、「最初はネガティブな面ばかり見ていたが、今ではコロナになったからこそできたことやよかったこともあってポジティブに考えようと思いました」、「確かに今は色々と大変な時期だけど、自分自身や社会がいろんな面でいい方向に変わるチャンスでもあると思いました」、「違う世界がまた広がり、今は今で楽しめています」と危機に対して、チャンスでもあるというポジティブな姿勢をとる学生が増えてきています。

4. 大変さへ対する対処・対策

前の項目で感じられた不安や悔しさなどのネガティブな気持ち・感情をどのように克服・改善していたかの問いに、対象者のそれぞれの対処法をまとめました。2名の「特にない」を除き、趣味・好きな物事をする、自己説得と出来ることを探すの三つがありました。

7名の学生が趣味や好きな事をする と回答しました。「Wifi とパソコンを買った」、「ゲーム機を購入した」、「家で映画を見たり料理をしたり好きなことをした」、「オンラインで友達と話した」、「家にいることが多いため、好きなことを好きな時にできた」、「ストレスなくリラックスできた」、「気を紛らわしていました」が報告されました。

11名の学生は困難な状況を受け止めるように自分を説得しました。「自分だけではなく皆同じ状況だと思うことで気を紛らわせています」、「旅行や留学はいけないけど、今後制限が解除されたときに何をしたいかを考えることで気を紛らわしました」、「起きたことは仕方ないし、収束するのを祈り、収束したときやりたいことができるように今は準備をしようと思った」、「コロナに関しては、仕方ないと思ってあまり深く考えずに流している」、「みんなが同じ思いをして頑張っていると考えて前向きに捉える」、「墮落せずに出来ることを頑張りたいと思っている」、「マイナス面ではなくプラス面を考えるようにしている」などで、自分の中で納得できるように、現状を認識し、前向きにしようとする姿勢が見られました。

最も多い35名の学生は、コロナ禍の制限の中でもできることを探したと回答しています。「家でできることをするにあたって、To Do リストを作る、一日のスケジュールを立てて勉強を進めること」、「自分を見つめ直すこと」、「自分なりに家の中で運動をして気持ちを晴らしたり、英語学習をしたり、本や論文を見る時間を作り、自分の為になるように時間を過ごした」、「コロナだからできたことを

見つける（家でだらだら映画を見る、バイトを一生懸命するなど）。また、オンライン授業で学んだ技術を利用している」という回答もありました。「遠隔授業だからこそできること」をしたり、「できる範囲で行動する、Zoomをつないで友達と喋ったり」、「積極的にオンライン上のプログラム（海外の学生との交流・マナー講座など）に参加する」、「オンラインでの企業説明会やインターンシップに参加している」、「オンラインでもいいところはあるのでオンラインでできることを頑張りました」の声がありました。

5. 困難な状況で発見できた新たな自分

難しい状況への適応によって自分についてどんな新たな発見があった項目では、「特にない」、「特に思い浮かばない」の4名を除いて、残りの全員があったと回答しました。「考え方が変わった」、「自分には行動力・適応力・忍耐力があるとわかった」、「新しい趣味・興味・技能・時間管理法を見つけた」の3種類です。

一番多く語られたのが考え方の変化で20名でした。COVID-19の状況に慣れたことが述べられて、それまでの「普通の生活の幸せさがわかった」、「常識が変わった」との考えがありました。また、外出できないことに対して「ストレスがたまること」、「ストレス対処法を持ってなかったこと」の反面、「外に出なくても生きている」、「気持ちがあれば何でも楽しめる」、「行動次第で環境は変えられる」、「人々を救うために協力が必要だ」、「目標があったり、毎日忙しい方が充実感を得られるということも自分の中で新たな発見でした」などの新しい考え方が生まれました。考え方について、最も多く使われた言葉が「ポジティブ」でした。7名の学生が困難な現状に置かれている自分に関して、「何もできないと思っていたら何もできないけど、制限がある中でも、チャンスはあることに気づけた」、「難しい状況を前向きに捉えることができる」、「自分は相当なプラス思考であると発見しました」、「私は、意外となんでもポジティブに考えられるんだなと気づきました」のように、ポジティブに考えられる自分、積極的に生きることができる自分を発見したようです。

9名の学生が適応力、忍耐力と行動力について触れました。「意外と我慢できるものだなと感じた」、「大変なことがあっても頑張れると感じた」、「どんな場所でも適応能力のある人だということが分った」など適応力と忍耐力が感じられた一方、「課題を早めにする」、「ある事柄に一生懸命向き合うことができた」、「自

分から新しいことを見つけてやってみる」などの行動力が身についた学生もいました。

上記の考え方の変化と同じで、新しい趣味・興味・技能・時間管理があったとの回答が14件ありました。「いろいろなものに興味・関心を持つようになった」、「家でできることをしていくうちに、映画鑑賞や料理などの新たな趣味ができた」、「毎日パソコンを使うことで、以前に比べてタイピングが圧倒的に早くなった」、「人から教わらなくてもパソコンの使い方に慣れることができた」、「人と対面で会えなくなった分、文字だけのやり取りでいかにわかりやすく伝えられるかの練習ができたと思う」のようにパソコンの使い方が上達し、文字による意思伝達に力を入れる学生もいました。また、「対面授業の減少やオンライン授業の増加、外出制限などで家にいる時間が増えたので、時間を無駄にしないように、時間管理をしっかりする力が身についた」、「自宅で過ごす時間が増え、隙間時間に検定やTOEICの勉強に取り組んでいる」のように、時間の使い方を見直して、時間管理ができるようになったという声がありました。

6. 対人コミュニケーションの変化

新型コロナウイルスの対人コミュニケーションに対する影響として、コミュニケーションの手段、非言語的コミュニケーションと、その他との三つが現れました。

コミュニケーションの手段として、インターネットを通してSNSでのコミュニケーションが増えたことが18件の回答でわかりました。「対人コミュニケーションは劇的に減った」、「対面ではなく、非対面のコミュニケーションが増えた」、「直接会うことができないから、電話をしたり、文字を使って連絡を取り合うことが増えた」、「ビデオ通話等の普及率が上がり、離れた友人ともすぐに顔を見合うことができるので、とても便利だと感じています」、「ズームやビデオ通話などのオンラインツールを使ったコミュニケーションが増えた」、「オンライン上でのコミュニケーションが一つの手段として広く認識されてくるようになった」などの回答がありましたが、「コミュニケーションを必要とされる場が、リモートワークのように家の中まで侵食されてきたような感じもする」と懸念された部分もありました。

非言語的コミュニケーション、主に、顔表情、声の重要性や対人距離の変化に

ついて多く語られました。まず、表情や声について14件の感想があり、マスク着用や画面越しでのコミュニケーションが増えたため、「相手の表情がわかりにくい、読み取りづらい」、「相手の気持ちが伝わりにくい」、「SNSで相手の状況が把握するしかなかった」意見が合わせて8件がありました。その代わりに、「声の重要性を感じた」、「声の音量も変わった」、「目線を気をつける」、「目で表情を作ったりジェスチャーを多く使ったコミュニケーションになったと感じる」など、以前よりも非言語的な部分で意識していることが覗えます。対人距離の変化について、感染予防のため、ソーシャル・ディスタンスを保つことやインターネットを通してコミュニケーションをとることが一般的になったことで、対人距離が以前より遠くなったと感じた意見が10件出ました。「直接話すときも、ソーシャルディスタンスを取るなど、人との距離が遠くなりました」、「パーソナルスペースが広がったと思う」、「仲の良い人との距離はあまり変わっていませんが、それ以外では距離ができたなと感じる」などがありました。

最後に、コミュニケーション全般の変化が語られました。「人とコミュニケーションをとる機会が減った」、「オンラインでのコミュニケーションが増えて、円滑な関係作りが難しいと感じた」、「対人コミュニケーション能力の低下を感じる」ことが述べられ、その延長上に、「実際の対面授業に違和感があった」、「人と会うとかなり疲れてしまうようになった」、「相手が手を洗ったかなどに敏感になってしまった」、「長い会話を避ける」のような複雑な気持ちが報告されました。「対面のほうが気持ちが通じるなと感じました」、「友人と会う機会が減ったので、一回一回会う機会を以前よりも大切にするようになりました」という考えもありました。

7. 今後の対人コミュニケーションのあり方

COVID-19の影響によって今後対人コミュニケーションのあり方について、対面が減少し、オンラインでのコミュニケーションが増加するという回答が36件ありました。

「対面とオンラインの2つが共存する」、「オンラインでできることはオンラインでしていく」、「オンライン授業、オンライン面接、Zoom会議などが当たり前になってくる」、「在宅で仕事をするなど働き方を選ぶ機会が増える」、「オンラインも対面と同じように様々な人が活用し、主流になる」、「オンラインでコミュニ

ケーションをとれるツールが増えていく」、「オンライン上で自分の魅力をより伝える方法や、言葉遣いへの意識が人々の中で高まっていく」、「オンラインでのコミュニケーションなど新しい方法で対人コミュニケーションを取る機会が増える」、「リモートで会議をしたり、あまり直接的にコミュニケーションをすることを避けると思う」、「文字で会話をするが増える」、「距離のある対人コミュニケーションに慣れてくる」、「情報通信技術が無くては生活できない状況」ですので、「コロナが流行り始めた時よりはコミュニケーションしやすくなる」、などの傾向が予想されました。

オンラインコミュニケーション増加に伴いコミュニケーションが難しくなるという考えが多く出ました。「新しく知り合う人がとても減る」、「関係が希薄化する」、「相手の感情を読みづらくもなる」、「深いコミュニケーションのやり取りや円滑で友好的な関係作りが難しくなる」、「距離感をうまく取れず話ができない人が増える」、「対人関係に不安を抱く人が増える」、「表情よりアクセントを使う人が増える」、「少し警戒しながら会話を自然としてしまうのではないか」とコミュニケーションへの影響を懸念する学生がいました。その反面、「対面でのコミュニケーションを貴重な機会として大切にしたい」、「直接会って話せることがいかに嬉しいか」、「人間関係が広く浅くではなく、狭く深くに変化する」とまとめた学生もいました。

IV. 考察

上記の結果から、新型コロナウイルス感染症は研究対象者の日常生活に及んでいたさまざまな影響を明らかにしました。

まず学業への影響について、研究対象者の女性大学生にとっては、昨年度の四月入学時から、対面授業が少なく、遠隔授業が殆どでした。入学前に楽しみにしていた大学生活が思うようにならなくなり、授業だけではなく、ずっと夢として考え、計画していた留学や部活なども中止せざるを得ない状況が未だに続いています。授業がコロナ前のように対面で受けることができなくなったのが一番の大変さであることがわかりました。実際に大学に通って、クラスメイトと物理的に同じ時間と空間を共有して、授業を受けることで、新たな人間関係を築き、強化するという人間関係発展のプロセスができないため、人間関係について懸念する学

生が多くいました。

学業や人間関係などへの影響だけではなく、学生の心理的な影響もありました。不安、つらさ、孤独感、苛立ちや憤り、悔しさ、疲れ、驚き、落ち込みや意欲喪失などのネガティブな感情が語られた一方、一年以上続いていることから、「仕方がない」、「適応していくしかない」と現状を受け入れる学生や、もっとポジティブに自分がおかれた環境の中で出来ることをやる学生もいました。

様々な困難や複雑な気持ちに対して、どう対処していたのかについては、趣味や好きなことをする、自分を説得する、できることをやると主に三つの対策がありました。これらの対策に伴い、考えの変化、行動力・忍耐力・適応力、新しい趣味・興味・スキルと時間管理の新たな発見が報告されました。

対人コミュニケーションの変化については、インターネットを通してSNSでのコミュニケーションが増えたことが語られました。科学技術の発展やインターネットの普及によりSNSなどが一般的になって、対面でのコミュニケーションについて意識的に鍛える必要がありましたが、COVID-19によって急遽オンライン（遠隔）コミュニケーションが進み、バーチャル・コミュニケーションが主流となりました。バーチャルな空間で顔表情や声の使い方の重要性和、対人距離が以前より遠くなることが述べられました。今後の対人コミュニケーションのあり方は、対面が減ることでオンラインでのコミュニケーションが増加することにより、文字による会話が增えることやオンラインツールの活用がさらに普及し、主流となることが予測される反面、対面でのコミュニケーションが貴重で大切にされることが報告されました。また、オンラインで自分をアピールするために、伝える方法や言葉遣いへの意識が高まることが強調されました。今後人々のコミュニケーション能力が低下し、人間関係は希薄化していくのではないかと懸念されることがありました。

先述したPRTIMES（2021. 8. 11.）は文科省の「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」結果と、オンライン・リカレント教育のビジネス・ブレイクスルー大学（BBT 大学）がコロナ禍におけるオンライン授業について現役学生に実施した調査では、「オンライン授業における共通課題は、友人や教授とのコミュニケーションが不足することによる弊害が主な原因であると考えられますが、BBT 大学の学生においては、他の大学と比較して、悩みの相談先として学校の教職員や相談窓口に相談する割合が高い」という結果

が出ています。朝日新聞デジタル（2021. 9. 21.）は朝日新聞と河合塾の共同調査「ひらく 日本の大学2021」の結果では、「7割が友人づくりやストレス解消に大切なサークルなどの課外活動を課題に」挙げられました。調査対象の大学では退学・休学を防ぐ為、学生の相談窓口・メンタル面のケア体制の充実（84%）、対面授業をできるだけ増やす（70%）、学生への経済的支援（68%）、学生アンケートの結果を授業や大学運営に反映（60%）、学生と教職員の対面の機会を増やす（43%）が取り組まれていることが明らかになりました。

コロナ禍の影響でコミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄化を解消する、減らすためには、上記の調査結果などを鑑み、大学で活用できる部分が考えられます。対面授業が難しくても、オンライン授業で学生にクラスメイトとコミュニケーションができるグループ活動を増やすこと、内容をわかりやすくすることや、音声と視覚教材の活用などで、授業内容の理解を深めさせ、学生同士の関係が深まっていくように努力していけば、コミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄化を防げることができるとでしょう。また、教員は学生の出席動向や授業の参加状況に注意を払いながら、必要に応じて適宜励むように対応していけば、教員と学生間のコミュニケーションが成り立つことで、学生のメンタルケアや大学生生活の満足度につながるでしょう。

参考文献

- 朝日新聞デジタル（2021年9月21日）「大学の8割『学生のメンタルケアが課題』とくに心配なのは2年生」
<https://video.yahoo.co.jp/c/17147/1bb6ee0d1393bfc28e94b57e3a4e7764e02133dd>
- 朝日新聞デジタル（2021年8月10日）「コロナ禍の大学生、2年生は孤立しがち 同世代と会えず」 <https://www.asahi.com/articles/ASP8B5F9PP88UTIL01S.html>
- 大学ジャーナル（2021年8月11日）「大学のオンライン授業、96.8%が実施も準備不足否めず 日経BP全国調査」 <https://univ-journal.jp/110828/>
- FNN プライムオンライン（2021年5月25日）「コロナ禍で授業に取り残される学生が増加？ オンライン授業を“活かせる学生”と“活かせない学生”の違いを聞いた」
<https://www.fnn.jp/articles/-/186526>
- GLOBIS CAREER NOTE（2021. 8. 10）「コロナによって起こった社会の変化と、備えておくべき個人のキャリア」 <https://mba.globis.ac.jp/careernote/1120.html>
- Jcast（2021年8月14日）「コロナ禍のパンデミックは社会を変える！」

<https://www.j-cast.com/kaisha/2021/08/14418207.html?p=all>
厚生労働省「新型コロナウイルス感染予防のために」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kenkou-iryousoudan.html>
NHK（2021年8月4日）「新型コロナの影響 1860社が倒産 飲食店など中心にさらに増加か」
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210804/k10013179211000.html>
NHK Newsweb（2021年3月19日）「大学生の就職内定率5年ぶりに90%下回る 新型コロナが影響」
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210319/k10012923491000.html>
PRTIMES（2021年8月11日）「『オンライン授業 VS 対面授業』について 現役大学生調査 BBT 大学の調査結果とオンライン授業の可能性について」
<https://prt看imes.jp/main/html/rd/p/000000022.000059894.html>
PRTIMES（2021年6月18日）「コロナ禍で苦境の旅行会社、倒産・廃業が前年から倍増 初の年間200件ペースで過去最多更新確実に」
<https://prt看imes.jp/main/html/rd/p/000000306.000043465.html>
東洋経済 Online（2021年4月25日）「リモート強制された大学生たちの偽らざる本音」
<https://toyokeizai.net/articles/-/424730?page=3>
山梨県（2020年11月13日）「テーマ『働き方』～コロナ禍による影響・変化～」
<https://www.pref.yamanashi.jp/linear-kt/vision-suishin/documents/06kousou2-hatarakikata.pdf>